

台車

滋賀大学経済学部 近藤 豊将

着任当初（二〇〇八年秋）、常連客七名程度でスタートした私の授業も、今学期（二〇一〇年度春学期）には、履修者数が二五〇名に迫る人気授業に成長した。「多大な労力を割いて準備するのだから、お客さんが少ないと効率が悪い」とボヤいていた当時と比べると隔世かくせいの感がある。これも偏ひとえに、私の高潔こうけつなる人格とティーチングのきらめく才能に、遅ればせながら学生達が気付いた当然の帰結である。授業のたびに、学問の素晴らしさに感動しているに違いない。

日の出の勢いを誇る授業の人気に正比例して、その準備に伴う労苦も急増している。二五〇部もの講義ノートを運搬するのは、素手のような原始的手段では無理だ。そこで、思い切って近代的な最新資本に投資することとした。『サイレントカート・ミニ』という型の台車を購入したのだ。近所のホームセンターで売られていたところを、三、九八〇円にて（自腹で）購入した。

『サイレント』と冠かんされているのは、運搬時に音が出にくいように設計されているからだという。実際に使用してみても、カラカラという心地良い清涼音が軽く響くだけだ。ガラガラと無

粋な爆音をがなりたてる安物台車との性能差は明白である。

『ミニ』というだけに、売られていた店の中で最も小さい型の、激烈プリティな台車である。丁度、A四用紙を二列にして搭載とうざいすることができる。「大は小を兼ねる」などというつまらぬ言葉も存在するが、無駄に大きすぎて容量を余らせた姿は美しさに欠ける。優雅さに欠ける。出勤のたびに、愛車のキャパシティーに丁度マッチした分量の荷を運びながら、私は美と調和感に浸っている。そして、酔いしれている。

理想を言えば、講義に出かける時は大量の講義ノートを搬入しつつも、帰りは手ぶらで、ミニを軽快に転がしながら帰還したいものである。イキでイナセな大学教師とは、そういうものと決まっている。

ところがところが、特に中間試験が終わった頃から、講義の帰りも大量の余りを持ち帰ることになってきた。出席率が急速に低下してきたのだ。なぜか？ 考えられる原因としては、中間試験の出来栄できばえが良かったことがあげられる。中間試験のみで評価すると、半分以上の学生が「優」となってしまう。私の教え方が良すぎたことがその主因ではあるが、問題が簡単すぎた憾うらみみもないでもない。私の学生達に対する真の思いやりが、裏目に出たとも言えよう。彼らの気質を勘案すると、単位さえ取れそうなら、

それ以上出席するのは損だと思っているのではないか。

思うに、教える側の人格が秀でていっていると、学生達を惹きつけ人氣授業に成長するが、人格の度合いがある臨界値を超えると、逆に出席者数は減少に転ずるのであろう。私の場合は、すでにその臨界値を超越してしまったということか。

このまま出席者数が単調減少するならば、丁度よかったはずの愛車の容量が、無駄に余ることになるのではないか。長期的には、台車など必要ない状況に収斂するのではないか。そうなっては、無粋である。不良債権である。サンキュッパもの（自腹の）先行投資が、重く頭上にのしかかってくる。

経済学者として、そのような状況の阻止を画策せざるを得ない。

自らの人格を貶めてでも、出席者数を最大化すべきではないか。そのような考えが頭をよぎる今日この頃である。

（平成二十二年七月十日）